特別支援学級と通常の学級のよさを生かした
インクルーシブ教育の在り方

伊東　裕子・司城紀代美

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要　第8号　別刷

2021年8月31日

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要　第8号　2021年8月31日

特別支援学級と通常の学級のよさを生かした インクルーシブ教育の在り方†

伊東　裕子*・司城紀代美**
小山市立絹義務教育学校*
宇都宮大学大学院教育学研究科**

本研究では、特別支援学級と通常の学級、それぞれの良さを生かしながら、インクルーシブ教育をどのように進めていったらよいのかを文献研究と調査研究の両面から探った。

研究を通じてつなぐことの大切さが明らかになった。その子の特性を理解し、つないでいくことで、本人にとっての負担も少なくなる。幼稚園～小学校、小学校～中学校、中学校～高校と丁寧につないでいくとこで、本人にとって学校生活が過ごしやすくなることだろう。それと共に、インクルーシブ教育の考えが広がる可能性ももっている。「つなぐ」ということを意識した指導のあり方が今後必要とされる。

キーワード：特別支援学級、交流及び共同学習、インクルーシブ教育

1．研究主題設定の理由

平成24年7月に出された中央教育審議会初等中等教育分科会報告「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」では、「障害者権利条約によれば、インクルーシブ教育システムとは、人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な機能等を最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下、障害のある者と障害のない者がともに学ぶ仕組みであり、障害のある者が一般的な教育制度から排除されないこと、自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられること、個人に必要な『合理的配慮』が提供される等が必要とされている。」とある。みんなが共に生きる社会を実現するためには、インクルーシブ教育が非常に重要となってくる。

本研究では、特別支援学級と通常の学級（以下、通常学級）、それぞれの良さを生かしながら、インクルーシブ教育をどのように進めていったらよいのかを探っていきたい。

2．インクルーシブ教育とは何か

文部科学省の「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議（第1回）」（令和元年9月）における配付資料「日本の特別支援教育の状況について」では、特別支援教育について、「子供が在籍するすべての学校において実施されるものである」とされている。一人ひとりの教育的ニーズに合わせて、可能性を最大限に伸ばすために適切な支援を受ける権利が保障されている。子どもたちにとっての「多様な学びの場」を「連続性」のあるものとしてとらえ、学びの場を柔軟に使い分けながら教育を進めていく原理、可能な限り「共に学ぶ」ことを追究していくことがインクルーシブ教育システムである（青山, 2016）。

インクルーシブ教育は「障害のあるものとない者がともに学ぶ仕組み」のみととらえがちだが、ユネスコが提唱している「インクルーシブ教育」の広義な定義は教育そのものの在り方を問うている。そこでは、インクルーシブ教育について以下のように述

---

† Yuko ITO*, Kiyomi SHIJO**: Inclusive education that makes use of the merits of both special needs classes and regular classes
Keywords: Special Needs Class, Exchange and Collaborative Learning, Inclusive Education

* Kinu Compulsory Education School
** Graduate School of Education, Utsunomiya University
（連絡先：shijo@cc.utsunomiya-u.ac.jp）

べられている。

・主流からはずれやすい、排除されやすい子どもたちを含む全ての子どもたちの多様なニーズに対応することで、全ての子どもたちの学びが最大に引き出される教育システムを構築するプロセスである。

・（特別のニーズを有する）学習者の一部がいかにして主流の教育に統合していくか、ということではなく、教育システム全体をいかにして学習者の多様性に対応するように変容させていくかを模索する方向性である。

・教員と学習者の両方が多様性に対して居心地良く感じ、そして多様性を問題としてとらえるのではなく、教育システム・学習環境の質的向上への挑戦としてとらえることを目的とする。

青山（2016）は、これらのインクルーシブ教育のポイントとして、障害のある子どものみではなくすべての子どもであるということ、子どもたちを既存の教育システムに合わせるのではなく教育システム自体を子どもたちの多様性に合わせて変えていくということ、多様なニーズに対応できるより良い方法を模索し続けることと整理している。

さらに青山（2016）は、インクルーシブ（包含する）対象は誰か？というと、全ての子どもたちであり、「障害のない人が障害のある人をインクルードする」ということではなく、「誰もがお互いをインクルードする」ことこそがインクルーシブ教育であるとも述べている。インクルーシブ教育システムにおけるキーワードとして、「共に学ぶ」とあるが、これは、「子どもと子どもの関係を構築する」ことであり、子ども同士の関係作りを基盤とした学びといえる。

インクルーシブ研究会（2015）は、インクルーシブ教育を探求することは、それぞれに生活や発達の課題を抱える子どもたちが授業を通して共同し、どう学習の主体者になりゆくかを探る契機にもなると指摘している。

では、インクルーシブな教育実践をしていくためには、どうすればよいのだろうか。インクルーシブ教育研究会『インクルーシブ授業をつくる』(2015)、國分『教室で行う特別支援教育』(2003)、北脇『特別支援教育であなたの学校を変えよう』(2009) をもとに、必要と思われる視点をいくつか挙げる。

（1）子ども観・授業観の捉え直し

障害特性を理解して、子どもを理解したつもりになってしまうことがある。障害特性への配慮という名のもとに、“障害”への介入だけが焦点化され、“子ども”への働きかけが薄くなってしまうことがある。子どもを学習主体として理解して教育実践を行うことは、同時に、子どもを発達の主人公として理解する子ども観に根ざすものでなければならない。それは、それぞれの障害特性をもつ子どもが世界をどのように捉えるかを知り、そのことを通じて子どもがなぜ目の前の行動をするかを理解し、子ども自身が変わろうとする力を見極め、発達的な見通しをもって学習環境やカリキュラムを整えて行くことに他ならない。

（2）視点を変えた見方

毎日関わっていると、「なぜ同じことを繰り返すのだろう。」と悲観的になってしまうこともある。しかし、よく見てみると同じように見えても、実は違う部分があるかもしれない。同じように友だちとのトラブルがあったとしても、昨日とは理由が違うこともある。小さな変化やその子のくせに気付くためにも記録を残しておくことが時には役立つ。子どもをじっくり観察し、記録をすることで、今まで見えていなかったその子のくせやよさに気付くことがあるかもしれない。少し離れた位置から視点を変えて見ることで新しい気付きが見つかることもある。担任だけでは難しい時には、他の先生にお願いするのもよいだろう。また、「自分だったらどうだろう？」と置き換えてみることで、相手の気持ちに気付くこともある。

（3）通常学級でのユニバーサルデザイン

授業のユニバーサルデザインについては学校現場でもよく聞かれるようになった。しかし、教師の指導のテクニック集として位置づいてしまう危険性も考えられている。授業スタイルのみが強調されると、スタイルになじまない子どもを排除　してしまう可能性も出てきてしまうので注意が必要だ。子どもが誰と、何を行い、何を学ぶのかという視点を実践の中に位置づけ、特別なニーズをもつ子どもが授業の中で自分のニーズと向き合いながらも、「わかる」実感、「できる」経験、「またやりたい」という気持ちを育てて行くことが大切である。「わかりやすさ」を追究することは重要だが、すべての子どもがそうした授業の方法に当てはまるわけではないということも忘れてはいけない。授業を児童の実態に合わせ

ていくことが大切だ。

予定を視覚的に示す場もよく見られるようになった。しかし、「とても分かりやすくて安心する」という子もいる一方で、「次にこれをやりなさいと、急かされている気持ちになり好きではない」という子もいる。目の前の子ども一人ひとりをよく理解し、柔軟に対応していくこともユニバーサルデザインにとって大切なことである。

（4）主体的な学びが可能となる場所の保障

特別支援学級で先生や友達と生き生きと学ぶ子どもたちがいる。教室では出せない自分を出し、少人数だから伝えられることもある。また、自分のペースに合わせた学習を行うことにより、自信をつける子もいる。その一方で、自分だけがクラスを離れて別の教室に行くことを頑なに拒む子どももいる。「特別支援学級で学ぶこと」が子どもにとってどのような意味をもつのかを考える必要もある。場を用意するだけでなく、そこで学ぶことの意味を子ども自身が見出し、かつ、それが学校のなかで子ども自身が安心して誇れるものでなければならない。特別支援学級での存在感を見出し、「学ぶ場所が違っても、自分たちが平等でクラスメイトである」という価値観を育てることが大切である。同時に、通常学級の学級経営も重要になってくる。

（5）学校全体での取り組み

児童についての理解を、クラスの壁を越えて教師全員で共有していくことが重要だ。関係する職員とは積極的に情報交換をし、子どもの行動を繋げていく。また、自分一人で抱え込むのではなく、周りの職員や管理職に相談したり、連携を取っていったりしていくことも必要である。時には、医療機関との連携も必要になることもあるだろう。専門機関や保護者とも連携しながら取り組んでいくことが重要である。

（6）保護者との連携

インクルーシブ教育を行う上で欠かせないのが保護者との協力である。まずは、保護者と友好的な関係を作ることが必要である。つい、トラブルや困ったことが起きたときに連絡をすることが多くなってしまうが、学校で頑張っていること、できたことなど、よい変化が見られたときには積極的に知らせる。子どもを中心に、こんなことで困っているという、子どもの困り感を伝え、改善するためにはどうしたらよいか、どんなことができるのかを、一緒に探っていく姿勢で話し合いを進める。効果的に学べる方法が将来につながっていくということを踏まえ、丁寧に話し合いをしていくことが大切である。

3．特別支援学級と通常学級の良さを生かしたインクルーシブ教育

特別支援学級と通常学級の良さを生かしたインクルーシブ教育について考えるため、特別支援学級が新規に設置されたばかりの学校を対象に以下の調査を行った。

（1）入級した児童の特別支援学級での様子を観察し、児童の変容から特別支援教育のよさについて考察する。

（2）担任との情報交換や保護者アンケートを実施することで、今後の課題を考える。

（3）交流学習の様子や、周りの子どもたちとの関わりを観察することで、教室におけるインクルーシブ教育を見つける。

特別支援学級では、一人ひとりのニーズに合わせた教育ができる。支援学級に行くことで、自分のペースで学習したり、心を落ち着かせたりすることができている。支援学級で少しずつ自信をつけ、自己表現ができるようになってきたことで、交流学級へも楽しく通うことができている児童もいた。自己肯定感を高めることは、今後の二次障害を予防する上でも大切なことである。児童の実態に合わせて学習したり、支援したりしていく特別支援教育を行うことで、子どもたちは心が落ち着き支援学級での学びが充実し、さらに交流学級での活動にも前向きに取り組めるようになった。

また、各クラスでは様々なインクルーシブな教育が行われていることを再確認することができた。共に学ぶ工夫のある授業では、支援学級の児童も安心して学ぶことができるため、交流学級で楽しく学習することができているのではないだろうか。適切な支援、声かけを行うことで、子どもたちはみんなと一緒に学ぶことができていた。また、それらの手立ては、通常学級で生活している他の子どもたちにとっても分かりやすい手立てとなっていることもあった。周りの児童が支援学級の子どもたちを自然に受け入れていて、クラスの一員として接していたことも大きい。このことも子どもたちが、みんなと勉強することが楽しいという思いをもつことができている理由の一つだと思われる。通常学級の学級経

営の大切さが改めて明らかになった。

特別支援学級と通常学級、それぞれのよさを生かすことは子どもたちにとってのよりよい学びにつながる。保護者も子どもたちが自分のペースで学ぶことのできるよさを感じ、楽しく学校に通う様子を喜んでいた。

今後の課題としては、通常学級の授業の捉え直し、関係職員との連携、支援学級での学習指導等が挙げられる。子どもたちが主体的に取り組むために、教師が45分をいかに組み立てていくかを考えながら授業研究していくことも大切になってくる。また、関係する職員が多すぎて、情報の共有をすべて行うことが難しいという指摘もあった。よりよい情報の交換・共有をどのように行っていくかについても考えていく必要がある。さらに、通常学級と特別支援学級の関係をもう一度捉え直し、特別支援学級の意義というものを考えていきたい。教室にいられないから「支援学級」という見方をするのではなく、本人が「『支援学級』で勉強するとできる！」という想いをもつために、支援学級では個のニーズに合わせ、自信をつけるための学習指導をしていくことも大切だ。

インクルーシブな教育を行っていく上で一番大切なのは、担任の意識だと思われる。すべての子どもが安心して過ごせる学級経営が一番の基本となるといえる。みんなが安心して過ごせる状態にするにはどうしたらよいかということを常に頭に入れておきたい。その上で、このメンバーでどう授業を作っていくかを思案していくことが大切だ。教材をどのように工夫すればよいか、つながっていくかを考えていくことが、子どもたちの主体的な学習につながるだろう。一方的でなく、お互いにつながる学びを生み出す必要がある。

通常学級担任が支援学級担任と連携しながら積極的な交流学習のもち方を考えることも重要である。例えば、体育の授業の前に支援学級担任と連携し、教室で練習してもらうことで変容があるかどうかを探ったり、時には国語や算数においても共に学ぶことで刺激を受け一緒にできそうな場面では、一緒に学習する時間をもつことなどが考えられる。グループ活動の在り方や学び方についても今後の課題としたい。交流学習の時には支援員と連携して共に学べる可能性を探し、積極的に場を作っていく。そうして、子どもたちのつながりを広げていきたい。

本研究での継続的な観察を通して感じたことは、つなぐことの大切さだ。複数の児童が特別支援学級と交流学級とを行き来していると担任はなかなか交流学級での様子を見ることができない。今回対象児を継続して観察したことで小さな変化に気付くことができた。日々の忙しさの中でなかなか気付けない小さな成長に気付くことで、認めたり褒めたりすることもできる。可能であれば、複数の先生と協力して授業中の様子を記録してもらうことで、様子を知ったり手立てを考えたりすることができるかもしれない。本研究を通して記録を残すことで、以前との違いに気付けるということもわかった。このように、特別支援学級と交流学級、学級担任と特別支援学級担任をつないでいく人の存在もその子の特性を理解し、つないでいくことで、本人にとっての負担も少なくなる。幼稚園～小学校、小学校～中学校、中学校～高校と丁寧につないでいくとこで、本人にとって学校生活が過ごしやすくなることだろう。それと共に、インクルーシブ教育の考えが広がる可能性ももっている。「つなぐ」ということを意識した指導のあり方も今後考えていきたい。

引用文献

青山新吾（2016）インクルーシブ教育ってどんな教育？．学事出版.

インクルーシブ授業研究会（2015）インクルーシブ授業をつくる―すべての子どもが豊かに学ぶ授業の方法―．ミネルヴァ書房.

國分康孝・國分久子（2003）教室で行う特別支援教育．図書文化.

北脇三智也（2009）特別支援教育であなたの学校を変えよう―インクルーシブ教育の推進方略―．明治図書.

令和3年4月1日 受理

Inclusive education that makes use of the merits of both special needs classes and regular classes

Yuko ITO, Kiyomi SHIJO